



Title	明治・大正期における外来語に付される補助符号について : 表記形式ごとの使用状況の比較を中心に
Author(s)	藤本, 能史
Citation	語文. 2023, 121, p. 28-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95425
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明治・大正期における外来語に付される補助符号について

——表記形式ごとの使用状況の比較を中心に——

藤 本 能 史

一 はじめに

外来語等の特殊な単語に、傍線^①・鉤括弧といった補助符号が付されるのは、一八世紀中期頃からである。近世においては、医学書・蘭学資料など一部の資料に限られていたが、明治時代に入ると、外来語に傍線・鉤括弧を付す表記スタイルが主流となる。文明開化以降数多の外来語がもたらされたことにより、外来語を片仮名表記する習慣が確立した。しかし、当時の主な表記体は漢字片仮名交じり文であり、そのままでは付属語と外来語の区別が困難となる。その区別を容易にする目的で補助符号が付されているのである。しかし、補助符号は漢字表記の外来語にも付されており、その使用状況は仮名表記とは異なっている。外来語の補助符号に焦点を当てた先行研究は、仮名表記に付される符号を中心に考察が行われており、漢字表記に付される符号についてはほとんど検討がなされていない。そこで本稿では、漢字表記・仮名表記

それぞれにおける、補助符号の使用状況の経年的な変化の実態を調査し、違いが生じた原因を考察する。

二 先行研究

二・一 近世期の補助符号に関する研究

先述の通り、外来語に補助符号が付されるのは近世期においてである。そこで、まず近世期の外来語補助符号に関する先行研究について概観する。

近世期の外来語補助符号に関する研究として、藤本(二〇二〇、二〇二二)が挙げられる。

藤本(二〇二〇)は、近世前半期医学書を調査対象とし、補助符号の使用実態について調査を行った。その結果、蘭方医学書においては、漢字片仮名交じり文において片仮名表記された外来語を区切る目的で鉤括弧を使用する資料が確認できたが、その嚆矢は、『蘭学階梯』(一七八八)『和蘭医事問答』(一七九五)など一

八世紀末頃に遡ることができると指摘した。また、表記体に関係なく、『蘭学階梯』、『和蘭医事問答』以降、蘭方医学書において外来語の卓立に鉤括弧が伝統的に使用されるようになったという仮説を得た。この仮説を立証するには、医学書以外の蘭学資料も調査する必要があるため、藤本（二〇二一）では、近世期蘭学資料を調査対象とし、補助符号の使用実態について調査を行った。その結果、外来語を括る鉤括弧は、『紅毛雑話』（一七八七）など一八世紀後期頃から確認できるが、これらは前野蘭化の蘭語翻訳法の影響を受けており、以降近世期蘭学資料において行われるようになった表記形式であることを指摘した。傍線も、外来語に使用されることが多いが、『西音発微』（一八二六）など蘭語学資料では、外来語以外の語句に付されることがある。

二・二 明治期以降の補助符号に関する研究

明治期以降の外来語補助符号に関する研究として、小林（一九八二）、深澤（二〇〇四、二〇〇六）が挙げられる。

小林（一九八二）は、漢字仮名交じり文において、地名に二本傍線（＝）、人名に一本傍線（—）を付す表記スタイルは、『官バタビヤ新聞』（一八六二）まで遡ることができると指摘している。更に、こうした表記スタイルが、明治期の一般的な表記スタイルとなったことも併せて指摘している。

深澤（二〇〇四）は、総合雑誌『太陽』の前誌群⁽²⁾を資料として、片仮名表記外来語の特質について、補助符号（鉤括弧・傍線）と表記体に視座を置いて考察を行っている。深澤氏は、表記体と文

字列との関係を整理するために、卓立表記・非卓立表記の別を立てた。以下の（c）（d）を卓立表記、（a）（b）を非卓立表記としている。

- (9) (a) 漢字で表記する。
- (b) 表記体を構成する仮名と同じ仮名で表記する。
- (c) 表記体を構成する仮名と異なる仮名で表記する。
- (d) 符号を付す。

四一頁

卓立表記・非卓立表記という観点から平仮名表記外来語と片仮名表記外来語との違いを考察した結果は以下の通りである。

- (19) 外来語平仮名文字列は、文字列単独で卓立表記にも非卓立表記にもなる。

- (20) 外来語片仮名文字列は、卓立表記されるのが基本である。文字列単独ではなく、符号が併用される。

四四頁

片仮名表記外来語は、符号を使用することで卓立表記としての機能を全うすることを指摘している。また、漢字片仮名交じり文から漢字平仮名交じり文への表記体の推移と、外来語の符号の有無の推移と相関関係にあることも示している。

深澤（二〇〇六）では、総合雑誌『太陽』及び『太陽』前誌群を資料として、地名・人名、それ以外の名詞にわけて、それぞれの補助符号の有無を調査している。地名・人名は傍線のみが語数増大に伴った量的規模拡大を果たしている。対してその他の名詞は、鉤括弧の量的拡大により、相対的に傍線の量的規模が縮小していく。つまり、地名・人名には傍線が、その他の名詞には鉤括

弧が使用されるといった、截然とした使い分けがなされるようになったと指摘している。また、補助符号衰退の要因の一つとして、漢字片仮名交じり文から漢字平仮名交じり文への移行を挙げている。片仮名交じり文において、片仮名表記の外來語を「てにをは」等と区別するために符号が使用された。しかし、平仮名交じり文に移行し、文字列単独で区別が可能になったことで、符号を付す必要性が希薄化したため、符号が衰退したのだと指摘している。

小林（一九八二）では、明治期の一般的な補助符号の表記形式について言及しているが、その実態については具体的に述べられていない。深澤氏の諸研究は、補助符号の役割について言及されているが、仮名表記の外來語に付される補助符号を中心に考察が行われており、漢字表記に付される補助符号についての考察は不十分な点がある。仮名表記だけでなく、漢字表記にも符号が付されている状況に鑑みると、漢字表記の使用状況も調査し、仮名表記における使用状況と併せて考察を行う必要があると考えられる。

三 調査資料・方法

調査資料として、国立国会図書館デジタルコレクション所収の書籍類を使用する。調査資料一覧は、別表にまとめたが、紙幅の都合上、*etc.*掲載の形を採ることを御了承願いたい。^③所収資料のうち、片仮名表記（資料によつては平仮名表記）の外來語（地名・人名）が使用されているものを調査対象とした。調査年度は一八六八～一九二五年とした。資料の選定基準として、NDC分類を参

考にした。各分野の所収資料数、また資料を概観したうえで窺える分野ごとの外來語の使用状況に鑑みて、各年哲学より四点、歴史より五点、社会科学より五点、自然科学より三点、外來語使用の少ない技術・産業・芸術・言語・文学は、これら五分野より三点を選定した。ただし一八六八～一八七二年については、調査対象として扱える資料が二〇点に満たなかった。以下、一八六八～一八七二年の調査資料数と分野毎の内訳を挙げる。

- ・一八六八～一八七二年（社会科学三点、自然科学一点、言語一点）
- ・一八六九～一八七〇年（哲学一点、歴史六點、社会科学五點）
- ・一八七〇～一八七一年（哲学一点、歴史五點、社会科学五點、自然科学二點）

- ・一八七一年～一八七二年（哲学二點、歴史三點、社会科学二點、自然科学二點）

- ・一八七二年～一八七三年（哲学二點、歴史五點、社会科学四點、自然科学四點、産業一点、文学二點）

地名・人名・官名・その他の名詞の四種類に分け、各種名詞に付されている符号を調査した。^④地名・人名以外の名詞のうち、官名のみ独立させたのは、凡例で、地名・人名以外の物名と官名とは別の符号を付すことが示されている資料が多くみられたためである。以下、例を示す。

- （一）一官名ハ左へ——人名ハ右へ——地名ハ右へ——物名ハ左へ——ヲ標シテ以テ分ツ看者之レヲ混スル事勿レ

『兵学提要』（一八七〇）

(2) 一原語ノ旁側ニ——形ナル單柱ヲ右ニ置クモノハ名氏ニシテ左ニスルモノハ物名及ヒ一切ノ名稱ナリ又——ナル雙柱ヲ右ニスルハ土地國名ニシテ左ニスルハ官職爵位尊稱及ヒ官衙ノ名稱等ナリ但シ一目シテ瞭然ナルモノハ故サラニ單雙柱ヲ贅セス看官之ヲ諒セヨ

『国会汎論』(一八八〇)
また今回は、文中における外来語を区別しやすくする目的で付された符号を調査対象としている。そのため、訳語の直後に原語を示すために用いられた符号(用例(3)、あるいは外来語以外の語も含む特定の名詞を示す場合にのみ用いられている符号(用例(4))は調査対象外とした。⁽⁵⁾

(3) 固ヨリ人間ノ貴賤貧富、智愚強弱ノ類ハ其有様(コンヂーション)ニテ幾段モ際限アル可ラズ此段階ヲ存スルモ交際ニ妨アル可ラズト雖トモ此有様ノ異ナルニ從テ兼テ又其權義(ライト)ヲモ異ニスルモノ多シ之ヲ權力ノ偏重ト名ルナリ

『文明論之概略』(一八七五)
(4) 氏の青年時代の著なる「ファイドーン」(Phaidon)を読めば、氏は當時昔から傳はつて居つた輿論を信じて居つた事が知られる。しかし其後に至つて「チマイオス」(Timaios)の中で、尚進んで「エピノミス」(Epinomis)の中で地球の軸廻轉を可也明白に述べている。

『世界自然科学史』(一九一七)
また別表で、「仮名替え」に「○」が付されているものは、地の文と外来語において、異なる仮名が使用されている資料を指す。

(5) は平仮名交じり文・外来語片仮名表記、(6) は片仮名交じり文・外来語平仮名表記の例である。

(5) 無機體定性離剖術に於ては此三藥の用甚だ少く僅にプロミイウムとヨジイウムを辨別するに要するのみ就中ホローホルムと硫化炭精を撰用す

『試薬用法』(一八七〇)
(6) 希臘ニ遊歴シテ、ペろばんねさすノ都府、すばるたノ王めねらすニ優待セラル、然ルニばりすハ其ノ優待ニ狎レ

『希臘羅馬史』(一八九〇)

四 表記毎の補助符号使用状況についての考察

本節では、仮名表記外来語・漢字表記外来語それぞれにおける補助符号の使用状況を概観し、その特徴についての考察を行う。

四・一 仮名表記外来語

まず、仮名表記外来語について。表1は、仮名表記外来語における符号有り・無しの資料数及び割合を、五年毎にまとめたものである。漢字片仮名交じり文・漢字平仮名交じり文に分け、それぞれをさらに仮名替え有り・無しに分けて示している。各項目の上部の数字は資料数、下部は資料数の割合(仮名替え有り・無しそれぞれの合計を一〇〇%とする)を示している。

表より、漢字片仮名交じり文は仮名替え無しの資料が多く、漢字平仮名交じり文は仮名替え有りの資料が多い点が窺える。仮名替えの有無で比較すると、仮名替え有りの場合は、年代が下るにしたがって、符号無しの割合が増加している一方で、仮名替え無

表1 仮名表記外来語における符号別資料数

	漢字片仮名交じり文						漢字平仮名交じり文					
	仮名替え有り			仮名替え無し			仮名替え有り			仮名替え無し		
	符号有り	符号無し	計	符号有り	符号無し	計	符号有り	符号無し	計	符号有り	符号無し	計
1868-1872				33		33	18	4	22	1		1
				100.0%		100.0%	81.8%	18.2%	100.0%	100.0%		100.0%
1873-1877				78		78	20	2	22			
				100.0%		100.0%	90.9%	9.1%	100.0%			
1878-1882				90		90	10		10			
				100.0%		100.0%	100.0%		100.0%			
1883-1887				80		80	17	3	20			
				100.0%		100.0%	85.0%	15.0%	100.0%			
1888-1892		3	3	59	2	61	28	8	36			
		100.0%	100.0%	96.7%	3.3%	100.0%	77.8%	22.2%	100.0%			
1893-1897				43	1	44	44	12	56			
				97.7%	2.3%	100.0%	78.6%	21.4%	100.0%			
1898-1902				34		34	45	21	66			
				100.0%		100.0%	68.2%	31.8%	100.0%			
1903-1907				22		22	44	34	78			
				100.0%		100.0%	56.4%	43.6%	100.0%			
1908-1912		1	1	18	1	19	32	48	80			
		100.0%	100.0%	94.7%	5.3%	100.0%	40.0%	60.0%	100.0%			
1913-1917		1	1	11	1	12	18	69	87			
		100.0%	100.0%	91.7%	8.3%	100.0%	20.7%	79.3%	100.0%			
1918-1922				12		12	12	76	88			
				100.0%		100.0%	13.6%	86.4%	100.0%			
1923-1925		2	2	2		2	3	53	56			
		100.0%	100.0%	100.0%		100.0%	5.4%	94.6%	100.0%			

しの場合は、年代に限らずほぼ符号有りであった。こうした違いが生じる原因はどこにあるのか。以下、仮名替え無し・符号無しの例を確認する。

(7) 而シテ共和軍ノ氣象ハ端ナク又マコーレー氏ガコロンウ井ルノ兵士ニ關スル一ノ話説ヲ相起セシムルニ足レリ

『最近五十年間米國繁昌記』(二八九)
「コロンウ井ル」は助詞「ガ・ノ」に挟まれており、語の境界が分かりにくくなっている。『最近五十年間米國繁昌記』は、ある程度米国史に通曉している人を対象として書かれたものと見られるため、そのような人にとっては不便はないだろう。しかし、初学者が読むには、即座に語の境界を判断することが難しく、不便に感じられるであろう。このような不便の解消が、符号を用いる目的の一つであると考えられる。この点は深澤(二〇〇六)も指摘している。

また深澤(二〇〇六)は、補助符号の衰退要因として、表記体の変化、即ち漢字片仮名交じり文から漢字平仮名交じり文への移行を挙げている。本調査でも、一八九三―一八九七年頃から漢字平仮名交じり文の資料数が漢字片仮名交じり文の資料数を上回っている。仮名替えという観点から見ると、先述の通り漢字片仮名交じり文は仮名替え無しの資料が多く、漢字平仮名交じり文は仮名替え有りの資料が多い。即ち、ほとんどの資料で外来語が片仮名表記されている。表記体は移行しているが、外来語仮名表記の形式は片仮名で固定されていると言える。

ここで、外来語の表記方法がどのように推移してきたのかを概観する。榎垣（一九六二）には、漢字表記の外来語について以下のように記述されている。

江戸時代には、かな文字表記法より漢字表記法が多かった。その理由は、わが国は鎖国政策のため欧米の知識の取り入れがおくれ、よほどその点で進んでいた中華の書物から学ぶことが多かった。そのため「巴里（^{パリ}）」「紐育（^{ニューヨーク}）」などの表記法をもそのまま借用したらしい。漢字は視覚的にまともって目に訴えるから、一字ずつ読まねばならないかな文字表記より便利だという点と、字数が少なくてすむという点がある。こういう漢字表記のいつまでも使われる原因で、「英語」「米
国」などがいつまでも使われている理由もそこにある。

榎垣（一九六二）一二六―一二七頁

江戸時代は、平仮名表記、片仮名表記も存したが、外来語は漢字表記されることがほとんどであったことが分かる。漢字表記は明治以降も使用され、地名の略称など一部の語によつては現在まで使用されている。

外来語を片仮名表記することは、新井白石がその先驅をなすものであると、松村（一九七七）が指摘している。さらに松村氏は、この形式が後の蘭学者に受け継がれ、「明治以後、国定の国語読本などで採用され、それが基準になって、次第に一般化していった」（二〇九三頁）と指摘している。片仮名表記が、明治以降現代に至るまで、外来語の一般的な表記形式となっている。

補助符号の衰退は、表記体の移行に加え、「外来語片仮名表記への固定化」も大きな要因となっていると考えられる。片仮名交じり文において、符号を付さなければ付属語との区別がつきにくい、平仮名交じり文になると区別が容易になるため、符号を付す必要性が希薄化したのである。

片仮名交じり文資料の中には、用例（6）のように平仮名で表記したり（以下再掲）、（8）のように太字のゴシック体で表記するなど、符号を付さなくとも付属語と容易に区別できるような表記方法を探った資料も見られる。

（6）希臘二遊歴シテ、ペろぼんねさすノ都府、すばるたノ王
めねらすニ優待セラル、然ルニばりすハ其ノ優待ニ狎レ

『希臘羅馬史』（二八九〇）

（8）上述ノモンテスキュート殆ト同時代ナルフォン・ペー
メル氏ノカリリナ法第百五章ニ對スル觀察中ニ於ケル

しかし、こうした表記方法を探る資料は非常に少ないため、明治・大正の片仮名交じり文において、仮名表記外来語を区別するための表記上の工夫は、補助符号が中心であったと考えられる。

四・二 漢字表記外来語

次に、漢字表記外来語について。表2は、漢字表記外来語における符号有り・無し⁽⁸⁾の資料数及び割合を、五年毎にまとめたものである。漢字片仮名交じり文・漢字平仮名交じり文それぞれの資料数及び割合を示している。

表2 漢字表記外来語における符号別資料数

	漢字片仮名交じり文			漢字平仮名交じり文		
	符号有り	符号無し	計	符号有り	符号無し	計
1868-1872	11	16	27	6	15	21
	40.7%	59.3%	100.0%	28.6%	71.4%	100.0%
1873-1877	40	37	77	12	9	21
	51.9%	48.1%	100.0%	57.1%	42.9%	100.0%
1878-1882	56	32	88	7	2	9
	63.6%	36.4%	100.0%	77.8%	22.2%	100.0%
1883-1887	40	40	80	10	8	18
	50.0%	50.0%	100.0%	55.6%	44.4%	100.0%
1888-1892	18	45	63	9	26	35
	28.6%	71.4%	100.0%	25.7%	74.3%	100.0%
1893-1897	7	37	44	8	48	56
	15.9%	84.1%	100.0%	14.3%	85.7%	100.0%
1898-1902	5	29	34	8	56	64
	14.7%	85.3%	100.0%	12.5%	87.5%	100.0%
1903-1907	3	19	22	3	74	77
	13.6%	86.4%	100.0%	3.9%	96.1%	100.0%
1908-1912	2	18	20		80	80
	10.0%	90.0%	100.0%		100.0%	100.0%
1913-1917	1	12	13		87	87
	7.7%	92.3%	100.0%		100.0%	100.0%
1918-1922	1	11	12		86	86
	9.1%	90.9%	100.0%		100.0%	100.0%
1923-1925		4	4		53	53
		100.0%	100.0%		100.0%	100.0%

表より、一八九三～一八九七年以降、符号無しが優勢に転じている点が窺える。仮名表記外来語は、符号無しが優勢に転じる時期が一九一三～一九一七年以降であるため、二〇年ほど早く補助符号の衰退が始まっている。片仮名交じり文・平仮名交じり文で比較すると、符号有り・無しの割合及び衰退の時期などは大差が見られない。このように、仮名表記外来語の使用状況と差が見られる要因はどこにあるのか。

外来語を漢字表記する上での利点について、樺垣（一九六二）は、「漢字は視覚的にまとまって目に訴えるから、1字ずつ読まねばならないかな文字表記より便利だ」という点と、字数が少なくてすむという点（二二六頁）を挙げている。また漢字は、仮名交じり文においては基本的に付属語で使用されることは少なく、ほぼ自立語で使用される。そのため、付属語と混同しやすい片仮名表記の外来語と比較して、文字列単独で語のまとまりが区別しやすくなっているのだらう⁽⁹⁾。よって、漢字表記においては、仮名表記と比較して、片仮名交じり文における符号の使用率が低くなり、且つ減少が見られたのだと考えられる。以下、用例を挙げておく。

（9）英都倫敦ハ英蘭ニ在テ古ヨリ英蘭ノ威勢余ノ三國ヲ壓シ中古^{一千八百六十三}年^{百三}ニ蘇格蘭ノ舊都壹丁不ヲ廢シ方今ノ倫敦一都ニ定ムル等ノ故ヲ以テ歟猶合衆國ト稱スハ北亞米利加ノ一部ナルニ

『西洋聞見録』（一八六九）
また、漢字表記外来語で注目すべき点は、外国地名の表記である。「英吉利」「垂米利加」のように表記する他、「英」「米」のように略称を使用することもある。非略称・略称の違いにより、補助符号の使用状況にも差が見られるかどうか、以下確認を行う。表3・4は漢字表記外来語の地名非略称・地名略称における使用状況を五年毎にまとめたものである。五年毎に最も資料数の多かったデータは太字で示している。

表3を見ると、地名非略称表記は、右複線が優勢であることが

表3 漢字表記地名非略称における符号別資料数

地名非略称	右複線	左複線	右単線	左単線	鉤括弧	符号有り	符号無し	合計
1868-1872	9	5		2		16	32	48
	18.8%	10.4%		4.2%		33.3%	66.7%	100.0%
1873-1877	38	1	1	5	3	49	45	94
	41.5%	1.1%	1.1%	5.3%	3.2%	52.1%	47.9%	100.0%
1878-1882	55	4	3			62	34	96
	57.3%	4.2%	3.1%			64.6%	35.4%	100.0%
1883-1887	38	3	4	2	1	48	46	94
	40.4%	3.2%	4.3%	2.1%	1.1%	51.1%	48.9%	100.0%
1888-1892	21		1	2	1	25	68	93
	22.6%		1.1%	2.2%	1.1%	26.9%	73.1%	100.0%
1893-1897	13	1	1			15	82	97
	13.4%	1.0%	1.0%			15.5%	84.5%	100.0%
1898-1902	11		1			12	84	96
	11.5%		1.0%			12.5%	87.5%	100.0%
1903-1907	6					6	92	98
	6.1%					6.1%	93.9%	100.0%
1908-1912	2					2	98	100
	2.0%					2.0%	98.0%	100.0%
1913-1917	1					1	96	97
	1.0%					1.0%	99.0%	100.0%
1918-1922	1					1	95	96
	1.0%					1.0%	100.0%	100.0%
1923-1925							51	51
							100.0%	100.0%

表4 漢字表記地名略称における符号別資料数

地名略称	右複線	左複線	右単線	左単線	鉤括弧	符号有り	符号無し	合計
1868-1872	9	3		1		13	27	40
	22.5%	7.5%		2.5%		32.5%	67.5%	100.0%
1873-1877	27	1	1	4		33	40	73
	37.0%	1.4%	1.4%	5.5%		45.2%	54.8%	100.0%
1878-1882	44	3	1			48	36	84
	52.4%	3.6%	1.2%			57.1%	42.9%	100.0%
1883-1887	26	1	2	2		31	54	85
	30.6%	1.2%	2.4%	2.4%		36.5%	63.5%	100.0%
1888-1892	14		1	2		17	68	85
	16.5%		1.2%	2.4%		20.0%	80.0%	100.0%
1893-1897	7	1				8	83	91
	7.7%	1.1%				8.8%	91.2%	100.0%
1898-1902	8		1			9	83	92
	8.7%		1.1%			9.8%	90.2%	100.0%
1903-1907	4					4	90	94
	4.3%					4.3%	95.7%	100.0%
1908-1912	1					1	99	100
	1.0%					1.0%	99.0%	100.0%
1913-1917							97	97
							100.0%	100.0%
1918-1922							93	93
							100.0%	100.0%
1923-1925							50	50
							100.0%	100.0%

窺える。他の符号も使用されているが、一九世紀末にはほぼ使用されなくなっている。一方で右複線も一九二〇年〔れんとげん学〕を最後に使用されなくなっている。符号無しが優勢に転じる時期は、一八八八―一八九二年以降であり、仮名表記地名と比較するとかなり早い。

次に表4を見ると、地名略称表記も右複線が優勢であることが分かる。右複線以外の傍線は、一九世紀中に僅かながら用例が確認できるが、鉤括弧は全く使用されていない。右複線は一九一一年〔独逸薬局方・鼈頭標註〕が最後であり、非略称表記に比べてその時期が早い。符号無しが優勢に転じる時期も、一八八三―一八八七年以降と、非略称表記に比べて早い。

表3・表4を比較すると、略称表記の方が非略称表記よりやや符号付記率が低いことが分かる。先述の通り、符号無しが優勢に転じる時期は略称表記の方が早い。また、非略称表記・略称表記が共に使用されている資料は九七〇点あった。そのうち非略称表記に符号が付されるが、略称表記には符号が付されない資料は三点(三・四%)見られた。一方、略称表記に符号が付され、非略称表記に符号が付されない資料は一点も見られなかった。王(一九九六)によると、開国以降、「それまでより大量に外国地名を使用する必要が出てきて、長く使われていた外国地名の漢字表記をより使いやすくするため、略称が使われるようになった」(二六一頁)とし、さらに「そういう時代のもとして一般の人々も外国地名の略称を理解し、更に使用するようになった」(二六一頁)

と指摘している。調査資料中においては、『西洋言行録』(一八七四)の凡例に以下のような記述がある(波線は筆者による。以下同じ)。

(10) 歐米有名ノ國ハ世人皆熟知スルカ故ニ唯頭字ノミヲ書セリ英トハ英吉利。佛トハ佛蘭西。普ハ普魯士。日ハ日耳曼ナリ聯邦或ハ米ト書セシハ即チ北亞米利加ノ合衆國ナリ人名地名ハ大抵平假名ヲ用ヒタリ字ノ右傍ニ複線ヲ施シタルハ地名ナリ單線アルハ人名ナリ 『西洋言行録』(一八七四)

この記述より、明治期には外国地名が熟知されていたため、略称が使用されるようになったと考えられる。略称の方が一般の人々に理解され、浸透するようになったため、非略称表記に比べ、符号を付して地名であることを示す必要性が薄くなったのだと考えられる。

四・三 小括

以上、仮名表記外来語・漢字表記外来語それぞれにおける補助符号の使用状況を概観し、その特徴について考察を行った。まず仮名表記外来語は、表記体の移行及び外来語片仮名表記への固定化が、補助符号衰退の主たる要因であることが分かった。漢字表記外来語は、補助符号の使用率が仮名表記外来語よりも低く、衰退時期も早い。漢字表記の場合、仮名表記より文字列単独で語のまとまりが区別しやすく、補助符号を付す必要性が薄い点が要因であると考えられる。また、地名非略称表記・略称表記を比較すると、略称表記の方がやや符号付記率が低い。明治期には略称

の方が一般の人々に理解され、浸透するようになったため、符号を付す必要性が薄まったのだと考えられる。また漢字表記に付される符号は、基本的に仮名表記に付される符号と同じであり、漢字表記に符号が付されるが、仮名表記には符号が付されない資料は見られなかった。

本節の考察では、補助符号の役割として、「地の文との混同を防ぐ」という点を示した。これは注1にも示したが、近世医学書・蘭学資料における補助符号の役割と同様である。明治・大正期外来語に付される補助符号の特徴として、別表を見ると分かるように、語の種類によって異なる符号を使用する点が挙げられる。このような特徴も、漢字表記・仮名表記における補助符号の使用状況の違いに影響を与えているのではないだろうか。語句のまとまりが分かれど、どのような語句であるかが分からなければ、読者が外来語に疎い場合は不便が生じてしまう。次節では、明治・大正期における補助符号の役割について、さらなる考察を行い、補助符号の使用状況についてさらなる検討を行う。

五 明治・大正期における補助符号の役割に関する考察

外来語に補助符号が付されるようになったのは近世後期である。仮名表記外来語の場合は、地の文との混同を避ける目的で主に鉤括弧が使われた。傍線の使用も見られる。漢字表記外来語の場合は、主に傍線が使われており、鉤括弧はほとんど使用されていない（以上、藤本（二〇二一）より）。しかし中には、明治期の表記

形式と同様の方法を用いている資料もある。例として、『遠西独度涅烏斯草木譜』（一八二八）を挙げる。（11）は補助符号を付す基準を示した題言、（12）は本文の一部である。

（11）一荷蘭之稱呼若地名人名藥名無直譯之漢字則更以其字音填入焉（ハドレンドウス アヘロー子）獨度涅烏斯「亞哥羅涅」之類是也從來漢人所對譯者通從焉（ハドレンドウス アヘロー子）業謁垺爾蘭杜（ハドレンドウス アヘロー子）外記依卜（ハドレンドウス アヘロー子）加得上（ハドレンドウス アヘロー子）「亞魯厄」（ハドレンドウス アヘロー子）論之類是也而地名者以雙畫傍引於字右人名以單畫傍引於字藥名者以「鉤畫」隔斷於上下而分別之其他名稱者分注於各處之下

（12）便チ「捌那設斯釋祿禰莫先達烏力烏莫」（ハドレンドウス アヘロー子）類前「亞釋兒列」（ハドレンドウス アヘロー子）衣草等ノ諸草是ナリ其他國君諸侯ニモ亦斯道ヲ好テコレガ神ヲナス人少カラス（ハドレンドウス アヘロー子）意爾吏力印國ノ王乾質烏斯末設鐸尼印國ノ王禮識瑪訶斯百爾哈繆斯國ノ王遏達留斯

明治以降になると、漢字表記外来語には徐々に符号が付されなくなり、仮名表記における補助符号より早くに衰退する。漢字表記に補助符号を付す役割が消失していったと考えられるが、考察の一助として、凡例の記述を参考にする。今回調査した全一一一六点の資料中一三四点の凡例に、補助符号の付し方が示されている。当然ながら凡例は、特定の一資料における補助符号の基準を示すものである。しかし、多くの凡例の記述を調査することで、明治以降の補助符号の付し方について、傾向が見えてくるのではないかと予想される。そこで凡例をもとにして補助符号の役割を考察していく。

まず符号を付す目的としては、以下のように示されている。

(13) エンは人名、ロンドン^ハは地名、カピテインは役名、カルラントは物名なり、左右に單柱及柱を引て之を區別す。

『英蘭會話篇訳語』(二八六八)

(14) 一官名爵名ハ左ヘ^ハ地名ハ右ヘ^ハ人名ハ右ヘ^ハ物名ハ左ヘ^ハ——ヲ標シテ區別ス^ハ看者之ヲ混スル勿レ。

『日耳曼史略』(二八七六)

(15) 一人名には單線、地名には複線及び原名には括弧を加へて其區別を明にせり。『理論応用新式写真活法』(一八九六)
補助符号には語の種類を標示し、読者にとつてより読みやすくする面があることが分かる。平仮名交じり文、片仮名交じり文両方にこのような記述が見られるため、語の種類が、符号の本質的な機能としてあったのだと考えられる。鉤括弧は、仮名表記外来語を括る目的で使用されるようになり、本質的には語の種類を標示する機能はなかったが、(11)のように、特定の語を示す用法が確認できる。それに加えて、地の文と外来語文字列とを區別する役割も有していたのだと考えられる。

また、外来語の表記形式と符号の関係については、以下のよう
な記述が見られる。

(16) 一地名人名ヲ記スルニ當リ、其著ルシクシテ普通皆人ノ知ルモノハ漢字ヲ以テシ、然ラサルモノハ假名ヲ以テス、是レ讀者ニ便ナラシメンカ爲メナリ、而シテ若シ假名ヲ用フル時ハ地名ニハ右傍ニ雙線ヲ附シ人名ハ單線ヲ附ス

『歐洲古代戰史略』(二八九二)

(17) 一、人名(單線を付す)及び地名(複線を付す)は、可成丈^ハけ原音に近からしめんが爲め、不熟なる漢字に依らずして、専ら片假名を用ゐたり。『羅馬盛衰記』(二九〇〇)

(18) 一、人名は右傍に單縱線を施す。

一、地名は右傍に複縱線を施す。

但し人名、地名共に漢字を以つて通用し、其の極めて明かなるものはこれが記號を附せず。『教育学通論』(二九〇六)

漢字表記には符号を付さず、仮名表記にのみ符号を付す資料が見られることが分かる(用例(16))。また、専ら仮名表記のみ用いる資料も見られる(用例(17))。先述の通り、明治以降外来語の漢字表記が使用された資料数は、仮名表記が使用された資料数より少なくなっている。加えて、仮名表記にのみ符号を付す資料が見られるようになっていく。この要因については、前節で示したように、漢字表記が、仮名表記に比べて視覚的にまとまって目に訴えるために読み取りやすいという点及び、明治以降の文章において、仮名が付属語を中心に使用されるのに対し、漢字はほぼ自立語に使用されるため、符号を付さなくても一語であることの識別が容易である点が考えられる。また、漢字表記の使用を、ある程度一般に認知された語に限定している資料も見られる(用例(18))。先述の通り、補助符号は語の種類を區別する役割と、地の文と區別する役割を有している。一般に認知されているということとは、符号を付さなくてもそれが人名や地名であることが理解で

きる語ということである。そのため、漢字表記の語には符号を付す必要性が失われ、仮名表記にのみ符号が付されることになるのである。よって、漢字表記における補助符号の衰退が仮名表記より先に起こるのは、まず、外来語の主要な表記形式が漢字表記から仮名表記に移行し、その上で漢字表記される語が一般に認知される語に限られるようになったことが原因であると考えられる。その結果、仮名表記には符号が付されるが、漢字表記には符号を付す必要性が失われ、衰退していくのである。

六 おわりに

本稿では、以下のことを述べた。

- ・ 仮名表記外来語の場合、漢字片仮名交じり文では仮名替え無しの資料が多く、漢字平仮名交じり文では仮名替え有りの資料が多い。この点から、表記体の移行及び外来語片仮名表記への固定化が、補助符号衰退の主たる要因であると考えられる。
- ・ 漢字表記外来語は、仮名表記より符号の衰退時期が早い。仮名表記と比較して、漢字表記は文字列単独で語のまとまりが区別しやすく、補助符号を付す必要性が薄い点が要因であると考えられる。
- ・ 地名非略称表記・略称表記を比較すると、略称表記の方がやや符号付記率が低い。明治期には略称の方が一般の人々に理解され、浸透するようになったため、符号を付す必要性が薄まったのだと考えられる。
- ・ 外来語の主要な表記形式が漢字表記から仮名表記へ移行し、そ

の上で漢字表記される語が一般に認知される語に限られるようになったために、漢字表記に符号を付す必要性が失われた。

本稿では明治以降を中心に考察を行ったが、小林（一九八二）は、地名に右複線、人名に右単線を付す表記形式の嚆矢を『板バタビヤ新聞』（一八六二）であると指摘している。筆者は、藤本（二〇二二）で近世期蘭学資料における補助符号について調査を行ったが、前章で触れた『遠西独度涅烏斯草木譜』（一八二八）以降、『バタビヤ新聞』と同様の表記形式は確認できなかった。そのため、地名に右複線、人名に右単線を付す表記形式定着の要因を考えるには、幕末期における補助符号の使用実態を調査し、明治期との連続性を捉える必要がある。幕末期に本邦にもたらされた、後期漢訳洋書には、『バタビヤ新聞』と同様の形式で傍線が使用されている。飛田（一九七四）は、現在のように「レ」と「ル」を使い分ける句読法は、後期漢訳洋書に源流を求めることができる」と指摘している。筆者は傍線についても、後期漢訳洋書との影響関係が認められると考えるが、検討は紙幅の都合上別稿に譲る。

注

（１）線の位置及び本数によって単語の種類を区別する方法として、朱引がある。朱引は、個人的な手控えとして読み手が施すのに対し、近世医学書・蘭学書の版本に見られる傍線は、予め印刷されており、読み手に、ある特定の種類の語であることを明示する役割をもつ。私的・公的という点で、両者の性格は異なる。一七世紀の漢籍において、同様の目的で予め傍線を付した資料が確認できる（原則

本は、艾儒略（一六二六）『西學凡』、和刻本は、竹中通庵（一六九二）『古今養性録』など）ため、本邦で流用した可能性が考えられる。ただし、前野蘭化（一七九三成立）『魯西亜本紀略』、桂川国瑞（一七九四序）『北槎聞略』など、外国地名に右複線・外国人名に右単線を付すというような、朱引の形式を踏襲したと見られるような例も確認できる（以上、藤本（二〇二〇、二〇二二）参照）。

(2) 『日本大家論集』、『日本之法律』、『日本商業雜誌』、『日本農業雜誌』、『婦女雜誌』の五誌。

(3) 調査データは、リサーチマップの資料公開のページに、藤本（二〇二三）調査資料一覧として掲載した。

藤本能史（Yoshitomi Fujimoto）・マイポータル・researchmap
<https://researchmap.jp/yoshi-fujimoto>

(4) 地名には「英」「米」などの略称も含める。官名には、官職名その他、爵位・尊称も含める。

(5) 用例（4）に挙げた『世界自然科学史』の場合、書籍名以外の名詞には鉤括弧が使用されていなかった。また外来語に限らず、全ての書籍名に鉤括弧が付されているため、外来語を区別する鉤括弧とは見なさず、調査対象外とした。

(6) 平仮名表記にする目的について、凡例に次のように記されている（傍線は引用者による）。

一 固有名詞ハ總テ之ヲ平假名ニセリ、而シテ人名地名ヲ以テ傍柱ヲ加ヘズ、蓋シ一讀ヨク其地名タルト人名タルトヲ判知シ得ベケレバ也。

(7) 同様の指摘は「外来語表記委員会の審議経過について（報告）」（一九八八年二月八日）においてもなされている。

(8) 『経済対話』（一八八八）、『希臘羅馬史』（一八九〇）、『教授之正誤』（一八九二）、『経済原論』（一九二二）、『あだむすみすノ帝國主義観』（一九二七）、『瑞西国弁護士法』（一九二四）、『司法資料第

六二号』（一九二五）の七点。

(9) 「漢字+仮名」という文字配列が可読性を高めているという点については、矢田（二〇二二）においても指摘されている。矢田氏は、漢字・平仮名併用表記の表記機能的効果について、以下の二点を挙げており、この両機能によって、漢字仮名交じり文の可読性が高まっていると述べている。

I、分節効果……平仮名・漢字の並びによって、その間に意味上の切れ目を示すことが出来る効果。

II、表意効果……表記対象の語の意味を示す効果。それには同音異義語の中からの一語の同定が可能となることを含む。用言については、語幹の漢字表記によって語の同定と語義表示を行うと共に、活用語尾の仮名表記によって文法的機能を併せて示すことができる。

(10) それぞれの資料数と割合は、

地名符号有り・人名符号有り……七四一点（六六・四％）

地名符号無し・人名符号無し……三六八点（三三・〇％）

地名符号有り・人名符号無し……三点（〇・三％）

地名符号無し・人名符号有り……四点（〇・四％）

となり、地名・人名の符号の有無が同一である資料は一一〇九点（九九・四％）となる。

調査資料

国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/>

・『遠西独度涅烏斯草木譜』

早稲田大学古典籍総合データベース

<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>

参考文献

榎垣実（一九六二）『日本外来語の研究』、研究社

王敏東（一九九六）『漢字による外国地名の略称について』『国語文字史の研究』三、和泉書院

大熊智子（一九九五）『引用符を用いた会話文表記の成立』『日本文学』八四、東京女子大学日本文学研究会編

小林雅宏（一九八二）『明治初期の翻訳書からみた外国地名の表記』『文研論集』第八号、専修大学大学院学友会

飛田良文（一九七四）『句読表示の成立過程―明治初年から『句読法案』まで』『言語生活』二七七号（飛田良文（一九九二）『東京語成立史の研究』に再録）

深澤愛（二〇〇四）『外来語の片仮名表記と表記体——『太陽』前誌群による考察——』『語文』八三、大阪大学大学院文学研究科日本文学・国語学研究室

藤本能史（二〇二〇）『近世前半期版本医学書における引用・卓立を示す補助符号について』『語文』一一五、大阪大学国語国文学会編

藤本能史（二〇二二）『近世期蘭学資料における引用・卓立を示す補助符号の使用実態について―鉤括弧・傍線を中心に―』『待兼山論叢文 学篇』第五五号、大阪大学文学会

松村明（一九七七）『新井白石と外国語・外来語の片仮名表記』『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』、明治書院

矢田勉（二〇一二）『漢字仮名交り文の成立』『国語文字・表記史の研究』、汲古書院

参考URL

「外来語表記委員会の審議経過について（報告）」（一九八八年一二八日）、第一七期国語審議会第七回総会

https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/

kakuki/17/sokai007/02.html

付記

本稿は、日本語学会二〇一七年度春季大会（二〇一七年五月一三日、於・関西大学）における口頭発表に基づき、加筆・修正を加えたものである。執筆にあたり、多くの方々にご教示・ご意見を賜った。記して感謝申し上げます。

（ふじもと・よしふみ 本学博士後期課程）